

令和元年度 第1回 高浜市誌編さん委員会			
日 時	令和元年9月30日(月) 午後2時00分～3時30分		
場 所	たかびあ 集会室1	傍聴人数	0名
出席者	委員	神谷純一 曲田浩和 石川伸 萩原敏和 村松輝一 後藤恵理 宮田克弥 中川健二 尾崎ヒロミ 神谷坂敏	
	事務局	こども未来部 部長 木村忠好 文化スポーツグループ リーダー 鈴木明美 同 主任 日吉康浩	
		株式会社ぎょうせい	土屋和重
次 第	1 あいさつ 2 議題 (1) 部会活動の進捗状況について (2) 「たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム」について (3) 『高浜市のあゆみ』の活用について 3 その他		
資 料	資料1 各部会の主な活動状況 資料2 シンポジウムの概要(案) 資料3 今後の普及活動及び市誌の活用(案) 別紙 かわら美術館企画展「山本良比古」展チラシ		

令和元年度 高浜市誌編さん委員会【第1回】

令和元年9月30日（月）

1. あいさつ

【神谷委員長】曲田先生を中心に順次進めていただいております。様々な調査をしていただいている。多くの方が執筆に入っているが、例えば資料館で何十年間も未整理のまま保管されていた資料を整理して、新たに発掘されたものも多くあるかと思う。広報の最後のページで毎回報告されているように、資料整理で得た情報が活用されていてありがたい。また、それを見た市民から様々な意見をいただくこともあり、そういったことからもしっかりと生かされていると感じる。今後、市誌が編集されて作成された後も、どう活かしていくかが大きなポイントになってくるので、みなさんからの建設的なご意見を頂戴したい。

2. 議題

(1) 部会活動の進捗状況について

＜事務局 資料1に基づき説明＞

【委員】八幡社の鞍というのは、昔、文化財保護委員の方がいろいろと調べていたと思う。こういう機会であるから、高浜の歴史で注目されていない人物にスポットを当ててもいいような気がする。例えば養鶏の関係では、有名な加藤弥七さんの他にもキーマンとなった人物がいたりする。また、吉浜の村芝居のことなどもどこかで入れておかないと知らない世代ばかりになってわからなくなってしまうので、この際色々に入れ込んでほしい。

【委員】八幡社の鞍は、現在どこに保管されているのか。

【事務局】かわら美術館に寄託されている状況である。

【委員】養鶏の技術を持ち帰ったのは弥七さんと聞いているが、実はもう一人いたということか。

【委員】その通り。加藤弥七さんがそのことを昭和15年に文章として書いている。

【委員】実際には2人して持ち帰ったということか。商売を立ち上げる時に半分投資した人かと思って聞いていたが、そうではないのか。

【委員】共同経営で始めた。その後もう一人の方は朝鮮に憲兵として出たことが文書に書いてある。

【委員】八幡社の鞍は高浜やこの近隣でつくられたものなのか。それともどこかから伝わってきたものなのか。

【事務局】それを少しでも明らかにできたらと考えているが、今のところわからない。八幡社の由緒などの文献を見ても、なかなか情報がつかめない。なので、今回の市誌でどのように扱うかは現在部会で検討中である。

【委員】おまんとして使われたのか、あるいは農耕に使われたのか、どのような用途なのかわかるといい。

【委員】鐙もセットになっているのか。

【事務局】鐙はないが、障泥はある。

【委員】八幡社の鞍は農耕用という感じではない。先ほどの養鶏にまつわる人物の話は文書に入れるのか。

【事務局】近代のところで、養鶏については項目が立てられているので、入るとしたらそこになるだろう。いただいた情報も、すでに執筆者にはお伝えしている。

【神谷委員長】養鰻には、特徴的な方はいるのか。

【委員】一色の方から吉浜にきた方がいる。一色の人を何人か連れてきたという。

【事務局】海の関係だと、かつて行われていた海苔の養殖についても、現代史で聞き取りを行った。

【委員】相撲のことも取り上げた方が良くと思う。

【委員】文化財部会の調査に「おためし」とあったが、これはどこで扱うのか。

【事務局】細工人形の奉納と同じ時期、同じ場所で行われるということなので、人形文化の項目の中で記述することを予定している。

【曲田副委員長】先ほど和鞍の話があったが、文化財保護委員会の中でも審議していただいて、今後どのようにして調査などを進めていくのか考えていく必要がある。文化財部会の活動は、現状の指定文化財だけでなく、将来指定に成り得るのかどうかを考えながら調査研究していくということである。結果的に、指定が5年後になるのか10年後になるかわからないが、そういったかたちで寄与していきたい。なかには、調整を進めてみたものの、今回は調査を断念せざるを得ない場所もあった。現段階ではそうだが、ゆくゆくは調査できるよう市をあげて取り組んでいただきたい。

以前の編さん委員会で、高浜は「大家族」をうたっているのでニューカマーにも目を向けないといけないという話題が出た。では実際にどういう人の話を伺えばいいのかという

ことで、以前高浜市役所で通訳をしていた方などをお願いしようということになった。ニューカマーについて扱うということは、他市はどこも行っていない試みだと思う。高浜ではどんどん外国の方が増えているので、そこに踏み込まないと今の高浜が見えてこないし未来も描けないと思う。生活誌部会の部会長である佐野先生は、普段から国際的な感覚で研究されているので、そういった方が編集をしながらつくっていく。ニューカマーの内容も含めた生活誌部会の聞き取りの良い点は、いきなり市誌の執筆ではなく、『高浜市のあゆみ資料』という形で先行して冊子を出し、それをベースに市誌の本文を編集していくので、今回の市誌に何を掲載すべきかという取捨選択ができる。現在、名古屋市立大学の学生さんが編集されているので、それを編集委員会でも議論していきたい。

近世・近代は相当な数の資料が出てきた。というよりも、すでに郷土資料館にはたくさんの資料があることはわかっていたが、手をつけられずに未整理状態であった。それが、是非みなさんに見ていただきたい程きれいになった。そういったたくさんの資料を活用しながら、様々な観点から調査・執筆を行っている。先ほどの養鶏のお話で気になったところだが、もちろん加藤弥七さんやもう一人の人物は重要な方である。しかし、この市誌の中で特定の人物をクローズアップするのは難しい。ただ、そのような歴史があるというところは大事にしたい。もちろん高浜の歴史をつくってきた人物は重要である。しかし現状として、高浜はその歴史自体がわかっていない部分が多くある。今回は、高浜の歴史に関して新しい見方・考え方をしたうえで市誌を出す。そういった中、人物的な評価がなかなか定まらない中で、特定の人物を本文の中で登場させるのが難しい。今後必要であれば、重要な人物をクローズアップした冊子をつくるなりを考えていきたいと思う。様々な時代・分野で重要な人物はたくさんいると思うが、ある人は取り上げられて、ある人は取り上げられないということがあっては良くない。もちろん個人名が全く出ない市誌というのはないので名前は出ることもあるが、あくまで個人的な功績ではなく、その人物が関わったどのような事象が高浜の発展に大きく寄与したかという見方で書いていく。ただし、子どもたちが人物を通して高浜の歴史をみるということも有効だと思うので、今回の市誌編さんを、今後高浜で活躍した歴史上の人物を取り上げて大事にしていくということへの第一歩として考えたい。

編さん方針として、今回は各項目で見開き1ページを基準にする。内容として、なるべく網羅的に取り上げたいが、どうしても落ちてしまう部分もあると思う。これまで編さん委員会でも申し上げてきたが、今回の市誌は「インデックス」的な役割を持たせたいと考

えている。もしかしたら、もう少しボリュームがあったほうが良いという感覚も出てくるかと思うが、そのあたりはまた別冊資料で詳細に取り上げるといったことを考えていく。そして、さらに深めていきたい部分は、シンポジウムなどで取り上げていきたい。この先、大枠を変えることはなかなか難しいが、要望等があれば細かな調整は可能なので、ご意見いただければと思う。

【神谷委員長】ニューカマーについてだが、私が教育現場にいたころに、ブラジルの方が高浜へ来始めた。ブラジルについて何もわからないので、はじめは日本人の感覚で接していたが様々な違いに驚いたのを覚えている。考え方や生活ぶりは国によって様々なので、書き方は難しいが、そういった部分にも触れていくと非常に面白いとは思う。

【委員】外国籍の方は、はじめは言葉の問題があり、思ったことが上手く伝えられないこともあるが、半年一年と経つと普通に生活できるようになる。昨年度のシンポジウムでも話があったが、戦前から高浜はたくさんの人たちをソトから受け入れてきて、瓦産業に取り込んできた。戦後の高度経済成長時にも、そういったソトから来た人たちの力を借りてやってきた地域ではないかと思う。そういったことは、社会の授業などでも考える場面を設けたりしている。

現在、のびゆく高浜を編集しているが、30年前50年前で区切って、どのように人口が変化してきたかということをつまみながら、その時代を考えている。高浜の場合、1970年少し過ぎのオイルショック前からずっと人口が増えてきて、1985年頃から停滞したが、その後また増えてきている。もちろん自然の人口増もあるが、ニューカマーの方たちが来たことも関係しているため、そこも考えながら授業を進めている。今でも市の東側は宅地造成が進んでいるので、そういった市の様子とも関連づけながら高浜の変化をつまみしていきたい。

【委員】私は翼地区に住んでいるが、確認してみたら、地区内の人口に占める外国人の割合が9.5%程であった。市内の中で比較的外国人率が高い地域である。今の子どもは、何事も外国の子も一緒になって行すが、大人はなかなかそういう動きがないと思う。それは昔に比べ、外国の方と日常生活を共にすることが当たり前になっているからだと思う。昔はこうだったが今はこうなっているということ、しっかり残せたらいい。

【委員】ニューカマーの話で言うと、とにかく注目されがちなのはブラジルであり、最近では中国やベトナムである。経済界のところでは、そのあたりの国の方が必ず労働力として出てくる。今後、日本人の数が減っていくことを考えると、その分海外からの労働力が増

えてくると思う。今回の市誌編さんで、海外から来た方たちのことをきちんと整理しておくことが大切。どういう形で受け入れられたのか、良い面もそして悪い面もあるかと思うが、それらを上手に残しておくことが、後世の人たちの役にも立つと思う。知立東小学校の新生のほとんどが外国人という話があるが、それも決して他人事ではない。これから先、ニューカマーの方たちをどういうスタンスで受け入れていけばいいのかということがこの市誌を通して少しでも理解できたらいいのではないかと思う。

【委員】高浜市には、元々ここに住んでいた方、ソトから入ってきた方がいるけれども、全市民がもっと高浜の文化に触れることができるような形をつくっていかなければならないと思う。おまんなどの、高浜独特の文化財は外国人の方々がとても興味を持ち、新鮮なところがある。しかし、言葉の問題もあって見方がわからないということがあり、そのことに対して、現状説明できる人もいない状況である。そういうことを少しずつクリアしながらアピールしていくと、ニューカマーの方々にも、もっとこのまちが受け入れられていくと思う。

【委員】自分はこのまちに住んで20年になる。引っ越してくる際、高浜市は今後住宅地が増えるまちだということを知り、今後新しくなるまちなのだと思いながら引っ越してきたのを覚えている。なので、昔のことについては自分の子どもが社会科で勉強した「のびゆく高浜」を一緒に読んで知るくらいの知識しかない。しかし、新しい市誌ができあがったら、自分のように就職や結婚などを機に高浜へ来た人たちもまちの歴史を知ることができるようになるし、私自身も勉強しようと思っている。

【委員】私が住んでいる地区は、今たくさんの家が建っている。その中には外国人も多く、会うと挨拶をしてくれる。本当に外国の方が身近になってきたのだと感じる。スーパーなどに行っても、子どもが両親の通訳をしているのを見て、子どもの適応力はすごいと感じている。また、外国の方が地域のお祭り等の声掛けをしていることもあるかと思う。今回の市誌についても、子どもから親へその内容が啓発されていけばよいと思う。

【曲田副委員長】新たに事実としてわかったことがあり、高浜・吉浜・高取の旧三か村は、これまで刈谷藩領がずっと続いてきたと思われていたが、実は一時期、刈谷藩領ではない時期があったことがわかった。当たり前のように高浜の地域は刈谷藩領だと思っていたが、そうではないことが近世・近代・現代部会の村瀬先生の調査でわかってきたので、そういった新しい成果も掲載していきたいと考えている。

(2)「たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム」について

〈事務局 資料2に基づき説明〉

【曲田副委員長】2回目のシンポジウムになるが、今回は1回目よりも少し時代を遡って、近代の高浜のやきものは瓦だけではないというところを取り上げていきたい。昔は焙烙や雑器、火鉢等も盛んにつくられていた。特に市南部の高浜川沿いや碧南市の新川沿いといった、油ヶ淵から流れてくる川の沿いが主に産地であった。流通の面では、発表される豆田さんが碧南市の展示で多くの資料を活用しているので、それも併せて高浜市誌で一体化して入れたい。土管は常滑からこちらにきたが、一部誤解があつて、決して常滑で仲違いをしたことがきっかけで高浜へきたわけではない。それは、常滑に残されている鯉江高司さんの手紙を見てもわかるのだが、高浜へ土管がきてからも比較的交流があり、良い関係でやってきた。土管は近代の人々の生活には非常に大きな影響を与えたもので、現在土管はなくなったが昔はどれくらい大切なものだったのか消費者の目線も入れて見ていけたらと考えている。特に鉄道網が発達する時に、線路を引くと田んぼがふたつに分かれる。その時に土管を通さないといけない。日本全国に土管がいきわたっているし、上下水道の整備には必ず土管がないといけなかった。さらに、洋瓦というのは土管の技術が用いられている。この高浜で独自に発展していくというものも、常滑にはない歴史である。明治20年頃に常滑から伝わり、その後130年程経つが、その間に発展したという話も中に入れながら、フロアのみなさんと一緒に考えていきたいと思う。

【委員】現在も高浜市内で土管として使用しているところがある。春日神社周辺や二池町で、生活排水を流す排水溝として使用している。碧海町の路地を歩くと、昔はブロックがなかったので土留め代わりに土管を並べて、整地をした名残がある。旧道を歩くと大きな土管が井戸枠に使われている。まちを歩くとそういった昔の名残が見えるので面白い。鬼みちを歩くとき、瓦だけでなく土管も見てもらいたい。

【曲田副委員長】シンポジウム当日、現代に残る土管の活用ということで、今話にあった場所の写真をパネルにして展示するとよいと思う。

【委員】昔は工事費を抑えるためか、建物の基礎部分に土管を入れていた。

【委員】私は元々常滑出身なので、土管や井戸があつてどうしようと悩むこともあつた。昔の井戸は深くて大きいので、先ほど話が出たように、昔は土管を土留めにしていた。しかし、現代のような家の工事をすると土管が崩れて形が変形してしまう。そのうえどのように変形してしまうかわからないので、今では外からコンクリートでブロックをして止め

たりしている。しかしその影響で、鬼みち沿いの土管が埋め込まれた斜面が崩れた時に簡単に直せなくて、苦勞したということもあった。中が見えない状態で、配管や下水なども全部通っているの、結構大変であった。

【委員】井戸瓦というものがある。井戸の内側に瓦を設置する。

【神谷委員長】私の家も、昔の井戸にも瓦が使われていた。崩れてやめてしまったが。

（3）『高浜市のあゆみ』の活用について

〈事務局 資料3に基づき説明〉

【委員】まるごと宝箱に都合がつかず行けないこともあるので、その場合どんな内容で発表されて、どんな事実が出てきたのか、どんな宝物が出てきたのか全くわからない。その情報はどこで見られるのか、どこで公開しているのか、残念ながら全く掘めていない。HPにも書いていないし、Facebookでも盛り上がっていない。そういった資料はどうしているのか。

【事務局】まるごと宝箱の内容については、確かに現在はHP上でも公開はしていない。今回の市誌編さんの中で整理した資料のリストは、ある程度整備したといっても、まだ一般に広く公開できるほどのレベルには達していないと考えている。ただ市誌の本文執筆のための基礎資料とするため、今できる最大限の整理と写真撮影は進めている。今後、資料の公開の仕方は段階を踏んでしっかりと考えていきたい。

【委員】インターネットは無理だとしても、紙一枚でいいのでこんな内容でこういう事実が出ましたという程度の情報は欲しい。

【事務局】まだ広く周知できておらず申し訳ないとは思っているが、まるごと宝箱のバックナンバーの資料は、市立図書館の入口付近に、まるごと宝箱や市誌編さんのコーナーを設けてあり、そこで閲覧できるようになっている。

【委員】まずは図書館に足を運んでいただかないことには、様々な資料が揃っていても宝のもちぐされになってしまうので、PRの方法を考える必要がある。

【曲田副委員長】先ほど話が出た整理資料の活用ですが、どこかの時点で資料目録を出して、一度には無理なので段階を踏んでやらないといけないと思っている。タイミングもよかったのだと思うが、旧三か村の役場の資料が網羅的ではないが残っていた。なので、まずは高浜・吉浜・高取におけるかつての公的な資料から、財産として活用していくということを考えなければならない。冒頭に委員長からお話があったように、今回の市誌では、

多くの市民の方から情報をいただいている。その結果、取り壊される蔵の中に眠っていた資料が、廃棄されずに残すことができたということもあった。このように、市誌の取り組みを行っていたことで救出できた資料が多くあることも、市としてアピールしてもらって、すぐには難しいが、将来的には目に見えるような形で公開したい。どういう形で公開したり活用していくかは市の方で計画を立てて、そのプロセスを明確にしていくことも大切。平成29年度から発行している『高浜市のあゆみ資料』への掲載、インターネットでの公開など、様々な形で資料の公開・活用ができればいいと思う。

【委員】市長がかつて父親に、ご自分の生業の前身である土管屋を営んでいたころの資料をどうしたかと尋ねたところ、組合を解散した時に全てドラム缶で燃やしたという話を聞いたといい、それを非常に後悔している。今回の市誌は来年度で一旦完成となるが、市長の想いは、その後も継続してこのまちのあゆみを資料に残して欲しいということ。ここで事務局に確認したいのは、この委員会は市誌が完成したら一旦解散になると思うが、その後のことはどう考えているのか。

【事務局】この市誌自体は来年度で一区切りがつくが、『高浜市のあゆみ資料』は継続して発刊していきたいと考えている。前回の旧高浜市誌を作った時にもこういう資料はあり、全8巻あったが、継続することができずに途中で終わってしまった。今回はとにかく継続することを意識していきたいと考えている。

【委員】文化財保護委員会が引き継ぐという形になるのか。

【事務局】体制も含めて、持続的な形を考えていく。

【委員】そういうところに諮りながら残していくという癖をつけないと、また40年、50年が過ぎると活動が途切れてしまう。今回はそういったことにならないように考えてもらいたい。

【委員】いろいろ調べていると、例えばかつて町長であったり学校長であったり役所の管理職をつとめたりという方のご自宅から、古い資料がたくさん見つかることがある。しかし、そういった資料はご本人が亡くなると廃棄されてしまうことが多い。昔に戻ってシャッターを押したり、資料をつくることはできないので、そういったものは本当に大切にしてもらいたいと思う。

3. その他

〈事務局 かわら美術館企画展案内〉